

11 日本キリスト教海外医療協力会における女性医師の活動

藤本 大士

日本学術振興会／京都大学大学院教育学研究科

1960年に日本キリスト教海外医療協力会（JOCS: Japan Overseas Christian Medical Cooperative Service）が設立された。JOCSはキリスト教精神に基づいて、海外で医療支援をおこなうためにつくられたものであり、アジアやアフリカに多くの医療専門職を派遣した。そこから海外に派遣される者はワーカーと呼ばれ、最初のワーカーが梅山猛医師であった。梅山は1961年にインドネシアに派遣され、1967年まで地域医療に奉仕している。その他のワーカーとしては中村哲（1946–2019）医師の名前がよく知られているところだろう。中村は1984年にパキスタン・ペシャワールに派遣された、のち、アフガニスタンに移っている。アフガニスタンでは長年にわたって地域のインフラ整備に尽力したものの、2019年に同地で凶弾に倒れた。JOCSのワーカーは医師だけでなく、看護師、保健師、栄養士、助産師、作業療法士、病院事務員など多様な医療専門職が含まれており、今日に至るまで70人以上がワーカーとして世界中に送り出された。

JOCSの活動はプロテスタントによる海外医療宣教と重なる部分が多い。プロテスタントによる海外医療宣教は、19世紀に入りアメリカやイギリスを中心に進められた。その主たる赴任地はアジア、南米、アフリカなどであった。医療を通じて宣教をおこなう者は医療宣教師と呼ばれた。彼ら医療宣教師の基本的な行動指針は、医療が整備されていない国や地域に赴き、西洋医学を通じて現地の人々の身体を癒やし、キリスト教を通じて人々の魂を癒やすというものであった。JOCSのワーカーも医療宣教師に類似する考えに基づき、アジアやアフリカに赴き、現地の人々の身体と魂を癒やそうとした。

JOCSとプロテスタントによる海外医療宣教を比べたとき、JOCSには女性が多く関わっているのが特徴的である。たとえば、JOCSが最初に派遣した女性医師は小原安喜子（1933–2004）であった。小原は小学生のときにキリスト教の洗礼を受けていた。若い頃に、ナイジェリアで活動したスコットランド人女性宣教師マリー・スレッサー（Mary Slessor, 1848–1915）に憧れ、将来、海外で宣教師として働くことを志したという。その後、青山学院女子高等部・大学で学び、さらに東京大学で看護学を、千葉大学で医学を学んでいる。1964年に医師国家試験に合格すると、翌年から1968年までJOCSワーカーとして台湾のハンセン病療養所で奉仕している。小原はその後も生涯にわたってハンセン病医療や海外医療奉仕に関わり続けた。小原に続くように、JOCSからは多くの女性医師が海外に派遣され、その派遣先にはネパール、カンボジア、バングラデシュ、ウガンダ、ナイジェリア、タンザニアなどが含まれていた。

本報告では、JOCSの女性医師に注目し、彼女たちは何故海外で働こうと考えたのか、彼女たちが赴任先でどういった活動をしたのか、彼女たちにとって海外で働くことは何を意味したのか、女性ワーカーたちの間の共通点・相違点は何だったのか、などについて検討したい。その際、海外の女性医療宣教師の活動と比較することもできるだろう。拙著『医学とキリスト教——日本におけるアメリカ・プロテスタントの医療宣教』（法政大学出版局、2021年8月）でも論じたように、戦前の日本にはアメリカ出身の女性医療宣教師が来日している。JOCSの女性医師は、海外の女性医療宣教師の活動とどこが似ており、どこが異なっていたのだろうか。